

鷗外の『独逸日記』にあるモアビット病院とその歴史

泉 彪之助

著者は先に、衛生学者坪井次郎がローベルト・コッホからツベルクリンによる結核治療法の講習を受けたモアビット病院は、鷗外^①森林太郎の『独逸日記』にある「モアビットなる市病院」と同じであろうとした。一八八七年（明治二十年）、鷗外はベルリンを訪れた石黒忠恵を視察に案内したが、モアビット病院はその一つである。この病院について、小堀桂一郎氏が著書『若き日の森鷗外』の中で、鷗外自身が使用した案内書を引用して記載しているが、くわしい説明は省略されている。^②

著者は、ドイツ旅行中にミュンヘン大学医史学研究所のロッハー医師から文献を教示され、ベルリンでモアビット病院を外から一見した。帰国後、東京大学総合図書館の好意で前記案内書を調査し、またモアビット病院から同病院の『百年史』（写真1）と患者用案内書（写真2）を恵与された。同院第一外科医長クラス教授は、著者のためにわざわざベルリン市内の図書館を探索し、貴重な文献を恵与され、重要な事実を教示された。これらの調査と関係者の好意によりモアビット病院の概要を明らかにしたので報告する。

一・『独逸日記』中のモアビット病院の記載⁽²⁾

明治二十年八月十七日の項に次のように書かれている。

「十七日。石氏に随ひてモアビット Moabit なる市病院を觀る。院長グットマン Guttman と話す。口吻俗医に類す。説く所学理に合わざることあり。花卉を病院内に置き、其衛生上の利益鴻大なること、^マ特り病者の目を娛ましむるのみならずと云ふが若き、即是なり。」

この石氏は、ベルリン来訪中の陸軍省医務局次長石黒忠憲で、石黒は万国赤十字国際会議（カルスルーエ）および万国衛生デモグラフィイ会議（ウィーン）に出席するため五月二十八日横浜を出帆し、七月にベルリンに着いた。この機会にドイツの陸軍および医学施設を視察することとし、精力的に廻っていた。石黒は「それから順次に見学にかかることとして日々兵營・病院・衛生材料廠・学校・監獄・兵器製造所・練兵・新兵仕込・看護卒教育・選兵等を実験し」と書いて⁽⁴⁾⁽⁵⁾いる。

『独逸日記』の明治二十年十一月十四日の項に、「十四日。グットマン Guttman を訪ふ。独逸医事週報の編集長なり」という記事があるが、モアビット病院院長グットマンは Paul Guttman の時の Deutsche Medizinische Wochenschrift の編集者は S. Gutmann で別人⁽⁶⁾である。

鷗外森林太郎は、一八八四年（明治十七年）、陸軍省から衛生制度調査および軍隊衛生学研究のためドイツへ留学を命じられた。同年十月にベルリンに着き、ライプチヒ、ドレスデン、ミュンヘンでの留学を経て、一八八七年（明治二十年）四月、ふたたびベルリンにもどり、ローベルト・コッホに⁽⁷⁾師事した。この二度目のベルリン滞在の初期に、来訪した石黒忠憲や川上操六、乃木希典らを世話したのである。

小堀桂一郎氏が指摘しているように、このベルリンの案内に鷗外は二種の案内書を用い、モアビット病院の項には多⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾

くのアンダーラインをしている。

二・衛生学者坪井次郎とモアビット病院

前稿でのべたように、ミュンヘン大学衛生学教室のマックス・フォン・ペッテンコーフェルの下に留学していた坪井次郎は、一八九一年(明治二十四年)一月、政府からローベルト・コッホの結核治療法講習を受けることを指示されたが、当時コッホはエジプト旅行出発直前であった。同年二月再度出張の指令を受け、三月三十日ベルリンを訪れてコッホに会い、四月一日から一か月間モアビット病院で講習を受けた。坪井次郎は、五月二十日付けの文部省への報告書の中で次のように述べている。⁽¹⁾

「本年一月九日教授古弗(コッホ)に従ひ結核病予防及治療法伝習仕るべき旨電報の命を領し速に伯林府へ出張致すべき筈の処生憎古弗將に埃及地方の旅行に上らんとするの時に際し且つ三月下旬に非ざれば帰着せざる趣に付き当ミウンヘン府大学内科教授チムセン及外科教授アングレルに親炙致し同病院内外科患者の治療法を実験し傍ら右治療法に関する戴籍等取調べ居り候内二月十七日右に關し総務局長よりの公書に接し三月三十日伯林府に出張古弗に面会致し同氏の許可を得四月一日以来モアビット病院に於て同氏に親炙し結核病治療法を伝習せり」

そしてその結果は、

「以上グットスタット年報、独逸国内外科学会等に於て古弗療法に關する意見は未だ一に帰せざる所にしてツベルクリンが愈々結核病を根治せしむるものなりや否やの問は発見者たる古弗自己も尚ほ之を検究の間に置マヤにも關せず或は他の実験者にして其右に出づる確効を定言する者あり或は之に正反対を唱ふる者を生ずるに至れるが故に此に断言を試ることは余の躊躇する所なり、是れ発見以来時期の尚ほ浅き亦怪むに足らざる所なり、ツベルクリンの清浄法をして完全ならしめ以て有害なる副作用を去り且つ注射法を改良し經驗を積むに至らば該療法将来の望は期して待つべき所なるも未

だ今日其時期に達せざるを以て確實詳細なる報告は他日に譲る所なり」というのが結論であった。

コッホは、一八九〇年八月、ベルリンで行われた万国医学会でツベルクリンが結核に治療効果を持つと発表し、大きな反響を巻きおこした。その結果、リスターやコナン・ドイルを含む多くの医師と患者がベルリンに集まり、病院にすぐ入院できない患者が普通のホテルに泊まって病室の空きを待ったため、社会問題になったほどであった。⁽¹²⁾⁽¹³⁾ベルリンに集まった患者の治療実験は、シャリテやその他の病院で行われ、ベルリン市当局は、ツベルクリン療法のためにモアビット病院の五つの病棟、百五十床を提供した。⁽¹⁴⁾モアビット病院での治療は一八九一年九月まで続けられ、時には入院中の結核患者が三百人に達したという。

しかし一八九〇年から一八九一年初頭ごろになると、ツベルクリンは診断には有効だが治療効果は乏しいことが次第に明らかになり、コッホにたいする批判がおこった。コッホのエジプト旅行は、そうした批判から身を避けるためであったようにも思われる。

日本には情報が到達するのが遅れ、坪井次郎はツベルクリンの治療効果が否定されたころ講習を受けることになった。この講習の受講者に臨床家でない坪井次郎が選ばれたことやその他の経緯について、伊達一男氏が事情を考察している。⁽¹⁵⁾伊達氏によれば、ツベルクリン療法研修のため、坪井次郎の前に北里柴三郎がコッホの下での留学の延期を認められ、また坪井次郎の後、さらに三名が講習に派遣されている。

三、ベルリンの歴史とシヤリテ⁽¹⁶⁾⁽¹⁷⁾

ベルリンは、ケルン (Köln) (ライン河畔の都市ケルン (Köln) とは別) ・ベルリンの二つの小集落として、十三世紀はじめ歴史にあらわれる。ウィーンのようなローマ帝国時代からの都市とくらべると、その登場は遅かったが、ブランドenburg 辺境伯領、同公国の首都として次第に発展した。

一七〇一年、ブランデンブルク公国とプロイセン公国が統一してプロイセン王国が成立し、ブランデンブルク選帝侯の宮城があったベルリンが、プロイセン王国の首都となった。

一七一〇年⁽¹⁷⁾(二七〇九年?)⁽¹⁸⁾、ケルン、ベルリン、フリードリヒエウエルダー、ドロテーエンシュタット、フリードリヒシュタットの五つの町が合併して共同の行政組織を作り、ベルリン市を形成した。ベルリン最初の公的医療機関シャリテ(Charite)は、一七一〇年にペスト患者収容施設(Pesthaus)として開設され、一七二七年に恒久施設となってシャリテと呼ばれるようになった。⁽²¹⁾最初はシャリテ(慈善)という名前の通り、救貧院的な性格が主であったが、一八一〇年にベルリン大学が設立されると、シャリテはその関連病院となった。十九世紀前半まで、ベルリン市民一般の診療はシャリテが主に担当した。一八三五年六月に内閣が出した指令では、シャリテはベルリンの貧しい人たちに年間延べ十万日の無料診療日を提供する義務があった。⁽¹⁴⁾しかしシャリテにとつてこの負担は大きく、また大学付属病院としての性格が発展してくると、こうした形式の診療は好まれなくなった。

十九世紀半ばのベルリンでは、シャリテの他にエリザベート病院、聖ヘドウィヒ病院、ベタニエン病院、アウグスタ病院など、私立、教会立、ユダヤ人団体立等のいくつかの医療機関が設立された。⁽²¹⁾ベルリン市は市民の診療をこれらの病院にゆだねて自己の医療施設をもたず、ただ伝染病患者が発生した時に患者を収容する責任を持つにとどまった。シャリテがペストハウスとして出発したように、またコッホやペッテンコーフェルの業績が示すように、当時の都市はしばしば伝染病が発生し、多数の患者を生じて行政上重大な問題であったのである。ベルリン市は、パリザードンシュトラッセ(Palaisadenstr.)とギッチナーシュトラッセ(Gitschner Str.)に伝染病患者用の小さな施設を持っていたが、他には常設の施設がなく、伝染病患者が発生すると建物を借り上げて患者を収容するという方式を取っていた。⁽¹⁴⁾

一方ではベルリン市の人口は急激に増加し劣悪な居住環境を生じたので、一般の患者はますますふえ、市自身が診療機関を持つことが必要になった。そのため一八六七年に建築計画が開始され、一八七四年、フリードリヒスハイン(Fried-

lichshain) (ベルリン市東部)にベッド数六百の市立病院が開設された。⁽¹⁴⁾⁽²¹⁾⁽²²⁾ ちなみにこの前年、一八七三年にベルリンを訪れた岩倉使節団は、わずか二十年ほどの間にベルリンの人口が四二万から八二万に倍増したことを記録している。⁽²³⁾ 一八七一、二年ごろ、ベルリン市の人口は毎年四万から五万増加した。

この人口の増加は、ドイツ産業革命が一八五〇年代に最盛期を迎えたこと、一八七一年にプロイセン王国が中心となつてドイツ帝国が成立し、ベルリンが王国首都から帝国首都となったこと、普佛戦争賠償金の取得による経済発展を基礎として、一八七一―一八七三年、バブル経済に似た会社設立ブームがおこつたことなどが関係している。

四・モアビット病院の開院⁽¹⁴⁾⁽²¹⁾⁽²²⁾

これより先、一八七〇年に普仏戦争が始まり、その捕虜によつて持ち込まれたといわれる天然痘の爆発的な流行がベルリンでおこつた。一八七一年に入つて患者の数がふえ、流行が衰える様子を見せなかつたので、施設の増設が緊急課題となつた。

ベルリン市は四か所の仮設病舎を設置して患者を収容したが、その一つが、普佛戦争戦傷者のためテンペルホーフに増設されていた戦時病院を転用したもので、ここで二千人あまりの患者が治療された。しかし軍当局が演習地として使用するため土地の明け渡しを求めたので、モアビット (Moabit) 地区 (ベルリン市西部、ティーアガルテンの北) トウルムシュトラッセ (Turmstrasse) にあつた市有地で、農地として使われていたところに、仮設病舎を建設することになつた。一八七二年の一月から四月にかけて建築が行われ、十六棟の仮設病棟と付属施設が作られた。これがモアビット病院の始まりで、同院『百年史』は、この一八七二年を病院創設の年としている。⁽²²⁾

このテンペルホーフに建てられていた陸軍病院『独逸日記』では「第二衛戍病院」。正式名・das zweite Garnison-Lazarett⁽²⁴⁾ も、石黒らが視察した施設の一つである。石黒らは、視察の最初にここを訪れている。

また岩倉使節団は、モアビットにあつた製鉄所を視察しているが、『モアビート』は府の西北なる村にて、『スプレー』(注・シュプレー) 河の下流『チェル』園(注・ティーアガルテン)の北を流れる北岸にあり」と書いている。⁽²³⁾

皮肉なことに、病舎の建築の完成と共に天然痘の流行は急激に下火になり、伝染病棟は不要になつた。一方、ベルリン市の人口はふえ続けて医療需要が増加し、とくに小児患者がふえたので、モアビット病院では一八七二年五月に小児病棟が開設された。

前述のように一八七四年にフリードリヒスハインに市立病院が開かれたが、西部にも病院が必要とされ、一八七五年夏、モアビットの仮設病舎が正式に市立病院となつた。

文献『Medizin in Berlin』はこの間の事情を要約して、『モアビット病院は一八七二年にテンペルホーフの野にあつた仮設病院 (Barackenlazarett) の代替病院 (Ausweichkrankenhaus) として設立されたが、まもなく正規の市立病院となつた』と述べている。⁽²⁴⁾

元来ベルリンは、その東部から都市が形成されたが、西部へ向かつて発展し、このころ西部地域の急激な都市化を見た。平井正氏は、「ベルリンの西区は一八八〇年頃までは、まだ狐の出没する森や丘陵に過ぎなかつた。それがベルリンが帝国の首都となり、世界都市に発展したために、わずか二、三十年の間に、西部劇の町のように忽然として近代的大都市が出現した」としている。⁽²⁴⁾

仮設病院時代の責任者がハイム (Ernst C. Ludwig Heim)、市立病院となつて最初の院長がクルシユマン (Heinrich Kurschmann) (クルシユマン螺旋の記載者)、二代が『独逸日記』に出てくるグットマン (Paul Guttmann) (一八三四—一八九三) (モアビット病院在職・一八七九—一八九三) である。グットマンはシレシアで生まれ、ベルリン、ビュルツブルク、ウィーンで医学教育を受け、病院勤務中はベルリンで開業すると共にベルリン大学の私講師をつとめていた。モアビット病院では内科主任を兼ね、数冊の著書と多くの論文があり、『Journal für praktische Ärzte』の発行人でもあつた。鷗

外はグットマンを「俗医に類す」とあまり評価していないが、クラス教授から恵与された文献によると、音楽が堪能で、医学をやめて音楽家になろうとしたが、ベルリン・フィルハーモニー・オーケストラの指揮者であったビュロー(Hans von Bülow)から忠告されてあきらめたという。⁽²⁷⁾グットマンは、一八九三年、まだモアビット病院在職中に死去した。

鷗外らが訪れた時の病院の名称と住所は、Städtisches Krankenhaus Moabit, N. W., Thurmstr. 21で、病床数八五〇であった。⁽¹⁰⁾この名前は、一八八二年から病院の正式名称になっている。⁽¹⁴⁾住所の街路名と番号は、現在も同じである。

その後ベルリンでは、一八九〇年にウルバン(Urban)に第三番目の市立病院が開設された。これらの市立病院の設立に尽力したのが、ベルリン市議会議員であったルドルフ・ウイルヒョウである。⁽²¹⁾⁽²²⁾⁽²⁹⁾

五. その後のモアビット病院⁽¹⁴⁾⁽²¹⁾⁽²²⁾

モアビット病院は、最初内科、小児科の患者だけを収容していたが、手術室が建築されて外科部門も開設され、土地も広げられて仮建築が本建築に改築されるなど、次第に発展した。

一九二〇年、モアビット病院の内科は、フリードリヒ・ウイヘルム大学(ベルリン大学)の第四内科診療科に、外科は第三外科診療科に指定され、医学教育の一翼をなうことになった。⁽¹⁴⁾これを最初として、モアビット病院は大学関連病院として種々の発展を遂げる。ドイツにおける心身医学発達の舞台の一つとなったのも、同院である。⁽²¹⁾

同年、ベルリンは周辺市町を合併して大ベルリン市が成立した。この後ベルリンは、第一次大戦後の困難を克服していわゆる「黄金の二〇年代」を迎えることになるが、モアビット病院もその栄光と共に種々の問題に遭遇する。

同院にとって最大の危機は、一九三三年に始まったナチス(国民社会主義ドイツ労働者党)の支配と、第二次大戦の戦火であった。

モアビット病院は医師の七十パーセントがユダヤ系で、職員の一部が社会民主党員あるいは共産党員であったため、

早くから「赤でユダヤ」として目をつけられていた。ナチスが政権を取った後の一九三三年四月一日、ナチスの突撃隊が同院を襲い、ユダヤ人医師が、研究室、診察室、病棟、執刀中の手術室から追い出され、私物をまとめる暇も患者の引き継ぎをする時間さえ与えられずに、病院を追放された。このユダヤ人追放は医師にとどまらず、検査技師、看護婦、事務職員、現業職員にまで及んだ。⁽²¹⁾

一九三五年、同院は伝統あるモアビット病院の名を、ローベルト・コッホ病院に改名した。

後に院内にナチスに抵抗するグループが生まれ、内科医長グロースクルト (Georg Groscurth) は、反ナチの理由で一九四三年九月に逮捕され処刑されている。⁽¹⁷⁾⁽²¹⁾⁽²²⁾

モアビット病院は一九四〇年、最初のベルリン空襲によって患者、職員に犠牲者を出し、建物の一部が破壊された。⁽²¹⁾ その後も空襲による大きな損害を受け、大戦末期には危険を避けて病院が郊外に疎開したほどであった。⁽¹⁴⁾

第二次大戦終結後、一九四七年、病院はふたたび Städtisches Krankenhaus Moabit の名前にもどった。しかしそれに続くベルリン封鎖、東西ドイツの分裂、ベルリンの壁などによって同院の苦悩は続いた。前にのべたように、同院は一九二〇年からベルリン大学医学部の教育に参加してきたが、ベルリンの大学機構はベルリン封鎖のころ東西に分裂し、東西ベルリンがそれぞれの大学を持った。西ベルリンにあるモアビット病院は、東のフンボルト大学 (ベルリン大学) との関係が切れ、ベルリン自由大学と協力することになった。ベルリン自由大学医学部創設期の産婦人科の教育は、モアビット病院で行われている。⁽²¹⁾ なお患者用案内書以外、『百年史』以後の文献がなく、最近の状況、とくにドイツ統一以後の状況の詳細は不明である。現在の病院の正式名称は Krankenhaus Moabit で、経営主体は Gesellschaft bürgerlichen Rechts となっている。⁽³⁰⁾ (写真3)。病院の住所は今もトゥルムシュトラーセだが、実際の正面はビルケンシュトラーセ・ペルレベルゲルシュトラーセ (Birkenstr., Perlebergerstr.) 側にある。著者が撮影した古い建物は旧看護婦宿舎で、現在は管理棟として使われているという。⁽²¹⁾ (写真4)。一九七二年の病床数は、一千百十七床であった。⁽²²⁾



写真1 モアビット病院百年史の表紙
表紙の写真は、トゥルムシュトラーセ
にあったモアビット病院旧本館の正面入
り口で、この箇所は戦災を免れたが、戦
後、衛生局の建物を新築するため撤去さ
れた。



写真2 モアビット病院患者用案内書の
表紙



写真3 現在のトゥルムシュトラーセ側
のモアビット病院入り口（著者撮影）



写真4 戦災を免れ、現在も残って
いるモアビット病院の建物の一つ。
元は看護婦宿舎で、現在は管理棟(著
者撮影)

謝辞

この調査にご援助いただいたモアビット病院第一外科医長 Ernst Kraas 教授、同院事務局 Kubath 氏、ミュンヘン大
学医史学研究所 Wolfgang Rother 医師、東京大学総合図書館に深謝する。

なお Ernst Kraas 教授は、日独医学交流史の研究者であり、数年前に行われた日独共同の出版事業のドイツ側代表で、
『日独医学交流の三百年』“300 Jahre deutsch-japanische Beziehungen in der Medizin”, Springer Verlag, 1992 の筆
者の一人である。

この論文の執筆には、ベルリン自由大学医史学研究所 Rolf Winau 教授の著書“Medizin in Berlin”に負うところが多
い。記して謝意を表する。

(この論文の要旨は、平成六年五月、第九十五回日本医史学会で発表した)

文献

- (1) 泉 彪之助「衛生学者坪井次郎の経歴と業績」『日本医史学雑誌』三八卷三号、一八九二(平成四年)九月
- (2) 森 鷗外「独逸日記」『鷗外全集』第三五卷、岩波書店、一九七五(昭和五十年)
- (3) 小堀桂一郎『若き日の森鷗外』、東京大学出版会、一九六九(昭和四十四年)
- (4) 石黒忠恵『懐旧九十年』二五三〜二五五頁、岩波文庫、一九八三(昭和五十八年)
- (5) 坂本秀次「石黒忠恵と鷗外」、「石黒忠恵から見た帰国前後の森林太郎」、長谷川泉編『森鷗外の断層撮影像』(『国文学解
釈と鑑賞』四九卷二号)、一四九〜一五五頁および三二二〜三二二頁、至文堂、一九八四(昭和五十九年)
- (6) 巻頭編集者名・Deutsche Medizinische Wochenschrift Nov. 10, 1887
- (7) 『現代日本文学アルバム 第一巻 森鷗外』一三六〜一三八頁、学研、一九七四(昭和四十九年)
- (8) Fujii Masato: ADLERFLUG, der junge Ogai in Deutschland, Ikkubundo Verlag, Tokio, 1990
- (9) Führer durch das medicinische Berlin. Fischer's medicinische Buchhandlung. Berlin 1886. 鷗外文庫 東京大学総合

図書館蔵

- (10) Berlin und seine Sehwirtschaftigkeiten (den Teilnehmern am XIV. Internationalen Kongress für Hygiene und Demographie von Ortskomitee gewidmet). 鷗外文庫 東京大学総合図書館蔵
- (11) 坪井次郎「古弗結核予防及治療法(伝習報告書(文部省あて))」、『大日本私立衛生会雑誌』九九号、六三〇—六四六頁、一八九一(明治二十四年)
- (12) Wolfgang Genschorek: Robert Koch, S. Hirzel Verlag, Leipzig, 1987
- (13) トーマス・D・ブロック著、長木大三／添川正夫訳『ローベルト・コッホ』シュプリンガー・フェアラーク東京、一九九一(平成三年)
- (14) Goerlke, Heinz: 90 Jahre Städtisches Krankenhaus Moabit. Berliner Medizin 13: 267-278, 1962. ローベルト・コッホ研究所蔵 モアビット病院 Ernst Kraas 教授の好意による
- (15) 伊達一男『医師としての森鷗外』三二八—三四六頁、續文堂出版、一九八一(昭和五十六年)
- (16) 加藤雅彦『中欧の崩壊、ウィーンとベルリン』、中公新書、一九八三(昭和五十八年)
- (17) 杉本俊多『ベルリン』、講談社現代新書、一九九三(平成五年)
- (18) 三宅悟『私のベルリン巡り』、中公新書、一九九三(平成五年)
- (19) 木谷勤／望田幸男編著『ドイツ近代史』、ミネルヴァ書房、一九九二(平成四年)
- (20) 林健太郎編『ドイツ史(増補改訂版)』、山川出版、一九九二(平成四年)
- (21) Rolf Winau: Medizin in Berlin, Walter de Gruyter, Berlin・New York, 1987
- (22) 1872-1972 Städtisches Krankenhaus Moabit. Bezirksamt Tiergarten von Berlin, 1972. モアビット病院の好意による
- (23) 久米邦武編、田中彰校注『特命全權大使米欧回覧実記三』、岩波書店、一九八五(昭和六十年)
- (24) 平井正『ベルリン、一九一八—一九二二、悲劇と幻影の時代』六七頁、せりか書房、一九八五(昭和六十年)
- (25) 「クルシュマン」『岩波西洋人名辞典増補版』四六三頁、岩波書店、一九八一(昭和五十六年)
- (26) Gutmann, Paul in Willi Gorzny et al.: Deutscher Biographischer Index 2. G-K, 744s. K. G. Saur, München 他, 1986.

国立国会図書館蔵

- (27) Gutmann, Paul *in* Pagel : Allgemeine Deutsche Biographie (Nachtrag 1904) ドイツ国立図書館(西部)蔵、モアビット病院 Ernst Kraas 教授の好意による
- (28) グットマン著書
- 1) Lehrbuch der klinischen Untersuchungsmethoden für die Brust- und Unterleibsorgane mit Einschluss der Laryngoskopie (1872)
- 2) Die Pathologie des Sympathicus auf physiologische Grundlage bearbeitet (1873)
Gesamtverzeichnis des deutsch-sprachigen Schrifttums 1700-1910 より引用。モアビット病院 Ernst Kraas 教授の指示による
- (29) 吉田富三「Virchow 小記」ルドルフ・ウイルヒョウ著、吉田富三訳『細胞病理学』四九一〜五〇三頁、南山堂、一九五七(昭和三十一年)
- (30) die Patientenbrochüre, Krankenhaus Moabit, 1993. モアビット病院の好意による
- (31) モアビット病院・私信

(福井県立大学看護短期大学部)

Moabit Hospital in Ogai Mori's "Diary in Germany" and its History

by Hyonosuke IZUMI

On August 17th, 1887, Dr. Ogai Mori and Dr. Tadanori Ishiguro visited Moabit Hospital (City Hospital of Berlin at Moabit) , where later in April, 1891, Dr. Jiro Tuboi learned tuberculin therapy for tuberculosis from Dr. Robert Koch. The history of this hospital is reviewed.

In a severe epidemic of smallpox in 1870 to 1871, the City of Berlin provided four temporary institutions to admit the patients, but one of them, borrowed from a field hospital in Tempelhof, had to be removed because of a claim from the military bureau. As a substitute, barracks and accesories were built in the Moabit district in 1872.

In the later half of the 19th century, medical demand in Berlin was markedly increased by rapid expansion of population. To meet this demand, following the institution opened in Friedlichshain in 1874, the barracks in Moabit became a city hospital for Berlin citizens in 1875.

From 1920, the hospital was affiliated with the University of Berlin. Having overcome difficulties under the National-Socialistic rule, World War II, and the plight in international politics after the war, the hospital serves now, as much as in the past, the citizens of Berlin.